

ゾウとサイの日

校長 鈴木 隆志

あまり知られてはいませんが、10月4日は、『ゾウとサイの日^{*}』です。絶滅の危機にあるゾウ、サイ、そしてライオンのために、世界同時にマーチを行うというものです。日本でも2014年から実施されています。普段から、「サイ（しなサイ）より、ゾウ（するゾウ）が好き」と光っ子たちに話している私ですが、絶滅の危機にある動物たちの命を守るという思いはサイもゾウも一緒です。光八小ではゾウの絵本をたくさん集めています。その中から三つのお話を紹介します。

◆『牙なしゾウのレマ』（文／滝田明日香、絵／小林絵里子）

『レマ』という名前には、マサイマラの言葉で、「みんなに好かれる人」という意味があります。ケニアのマサイマラ国立保護区で獣医師として勤務する滝田明日香さんは、日本を拠点に広報活動や資金調達を担う山脇愛理さんと二人で、NPO法人『アフリカゾウの涙』を立ち上げ、絶滅の危機にあるアフリカゾウの命を守る取組を続けています。象牙の国際取引は1989年、ワシントン条約によって原則禁止されましたが、今でも象牙の密漁が行われ、たくさんのゾウの命が奪われています。この絵本を通して、アフリカゾウが直面する現状を伝え、象牙製品を欲しがらない世代を育てよう、人間と動物の共存について考えようという、強い思いが伝わってきます。

◆『ともだちをたすけたゾウたち』（文／わしおとしこ、絵／遠山繁年）

多摩動物公園には、1953年生まれ、現在の日本最高齢のゾウ『アヌーラ』が暮らしています。私は今年アヌーラに会ってきました。ゾウ舎では3頭のインドゾウたちが一緒に暮らしていますが、高齢のアヌーラは一人部屋にいて、のんびりとミストシャワーを浴びていました。

1979年春、26歳だったアヌーラは、病気にかかって瀕死の状態となりました。飼育員たちも助けようがなく、為す術を失っていました。そのときです。一緒に暮らしていた2頭のゾウたちが、一ヶ月間にわたって、アヌーラが倒れないようにと左右から横に立って支え、看護を続けたのです。このゾウたちの「利他行動」によって、アヌーラは奇跡的に命をつなぎ、今や最高齢となりました。この絵本は、ほんとうにあった話です。思いやりの心、他者のための行動には、感動を覚えました。

◆『ぼくははちぞう』（絵・文／葉祥明）

羽根があるけどちょうちょじゃない、蜜を吸うけどみつばちじゃない、空を飛ぶけど鳥でもない、ゾウに似ているけどゾウでもない、小っちゃな小っちゃなはちぞうくんは、実は、私たちのことかもしれませぬ。人間は一人一人違った個性をもって生まれたユニークな存在です。しかし、物心ついた頃から、ずっと、人と比較され、それでいながら画一化された生き方を強いられ、「本当の自分」が分からなくなってしまっています。……自分が何者で、一体何のためにこの世に生まれてきたのか、はちぞうくんとファンタジーの世界を通じて楽しく考えていきたい。作者の葉祥明さんの言葉です。

私は名札に、はちぞうくんのピンバッジをつけています。光っ子たちに、「するゾウ」の気持ちと「本当の自分」を見つけてほしいと願ってのことです。

今年度の全国学力・学習状況調査でも、「自分には、よいところがあると思いますか。」の設問に対し、光っ子たちは、全国や都よりも10ポイントほど高い結果が得られました。生命を大切に、他者のために行動し、自他のよさを見つめる、そんな光っ子たちであり続けてほしいと願っています。

*『ゾウとサイの日』のほかにも、8月12日は『世界ゾウの日』、4月28日は『ゾウの日』として制定されています。